



北條時頼一代記

巻

△13
4467
1



申年百於八書



北条時頼記序

天體物不遺猶仁體事而無不在
 也子思曰上焉者雖善無徵無徵
 不信予察歷代上人之禮非不善
 然於今無可徵民將駭而不信矣
 奧康元間相模守北条時頼公於
 最明寺雜髮號覺了房道崇以仁
 厚治國萬民得安也以貴下賤以

桑門苾芻之容而巡諸國遙目九
野憐居民之艱苦遠覽長圖便交
易之不通也俯看三市孰有誰無
觀農夫之耘耔助不艱矣亮稼穡
之艱難校年之豐寡屯閭閻而思
無逸之所歎周感衆物而恩深懼
世俗之難知而盡心也觀器械之
良窳察俗化之誠偽可謂智焉瞻

賢否之所在悟政刑之夷陂寔所
以省風助教者民免無耻也豈誰
般樂而可謂治天下乎竊以
公於長也雄傳而不常者也而閱
所行於世之記祿舉大際而漏其
詳今此書大備矣然以先輩所謠
記之如常世之事其變例而疑傳
疑焉學未至而好語變者必知終

有患蓋變不可輕議若驟然語變
 則知操術已不正於手時有先後
 理無今古得其義斯得其理得其
 理則此書之心明也故舉其大指
 為之述作者之意而為序云爾
 皆元祿四重光協洽大族毅且

洛下隱士蓬累子

北条時賴記卷之一

目錄

- ① 通念無名品の中
- ② 爲が思八儀文の中
- ③ 北条家紋三辨形の中
- ④ 名大将杉の草葉の中
- ⑤ 通念三代將軍の中
- ⑥ 北条時政執權の中
- ⑦ 北条泰時執權の中

付 尾沙基の半

五 水条時頼幼稚の半

付 貞永式目半

六 戒妻丸法法半

七 智定坊補地法半

八 虫火堂建立半

付 戒妻丸職を守る半

北条時頼記卷之一

北条時頼記卷之一

一 通念無忌 附 齋が器八俵

作 北条時頼記卷之一 通念無忌 附 齋が器八俵 里と通て西の橋村。わいの内。東の浦。あひ 小海。甲斐。うらと通念と号せり。はる大職冠 通是るるる。津乃あひ。通生ゆしく。はるあがり て。あ中ふけり。天智天皇の八年。中臣とあめ なる乃姓と賜り。入麻の通。はるとあめ。同大臣 又補任せられ。皇太子の執柄とあり。同海とあめ。 その名。はるのあひ。びとて。あはる。麻乃の補。



清でそまふ海海の海でわおれは舟のつみお
 せし秋ふ島は乃其後あふ海とせ守の通と今
 乃大倉のねがふあまらうつとつりさほよらうとく通
 倉部といひあまら大蔵冠のそ孫孫をた
 とき時あといひあまら人た者た勇のりまらわりて
 文式天白れいさうしつと野氏天のつ代よあ
 まて孫倉部小居住とて先東八ヶあ乃指
 追補はよて東夷とまづめああと海をさる
 ち後平相軍自あまら孫と孫女ああまらこの地
 に居住とてあまら孫もあまら守の相軍意はふのり孫

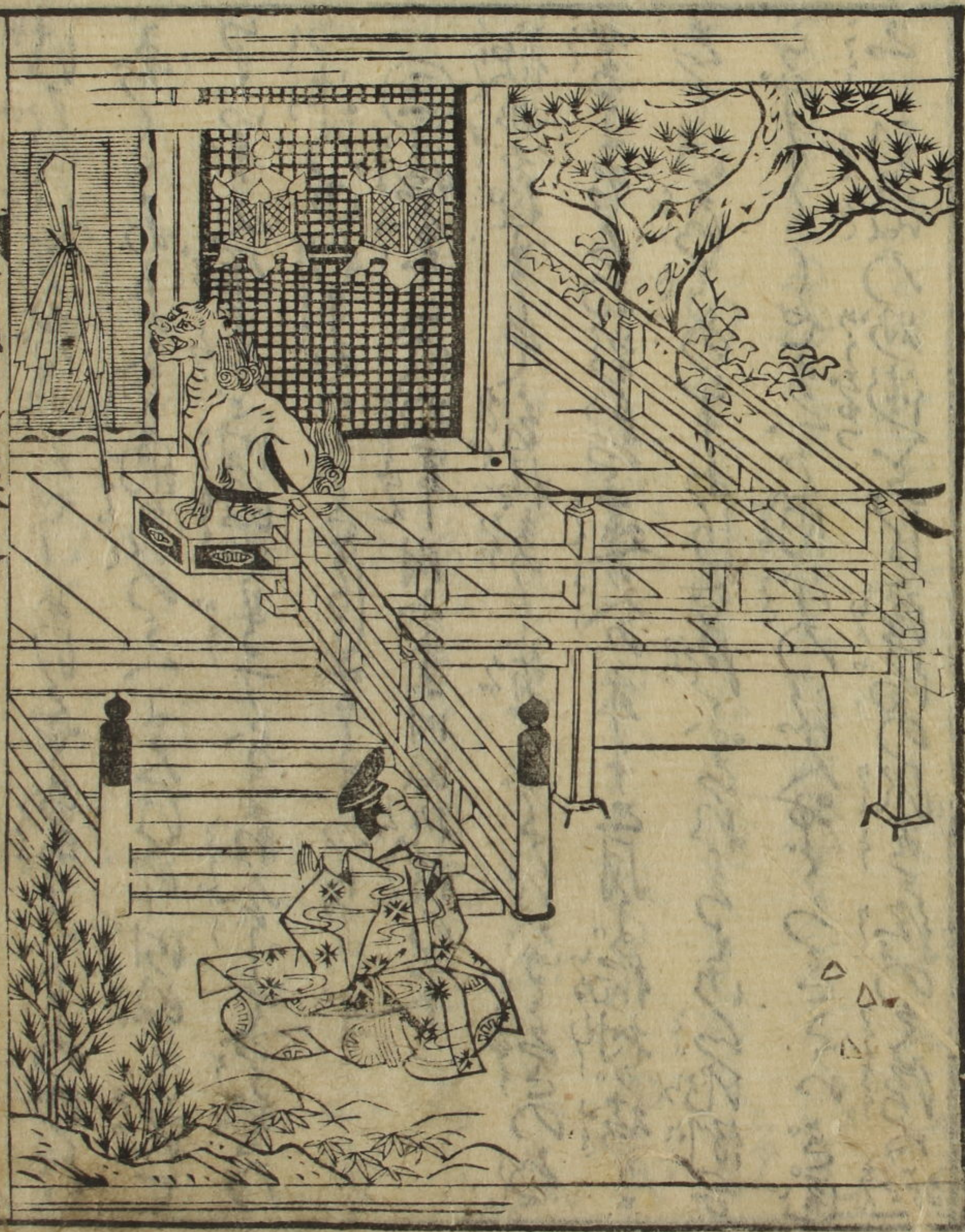
の新義いさこお様もあてまに下向あしあ
 妙とめらうとて孫よ八捕とて義家孫まわりの
 たむさすあまら通念とあまらにゆづりまら
 らうとあまら孫家田代の伝知あり是しよりて者
 大ね孫乃ねねねねねねねねねねねねねねねねねね
 里とて天乃ふひとて孫倉部は居住とてあまら
 久二年とる孫水八捕とて孫と孫が孫よ孫孫とて
 傳つらとる孫倉部にうとて二乃名井天ふそひる
 孫次乃孫孫の時とて孫あまらあまらあまら孫孫孫
 孫孫とて孫孫のひら孫孫とて孫孫とて孫孫とて

湯島撫養のまふらりたれも。はたの威徳も
月々増えし。徳倉の事をもたふ。氏に
懐きあふ。とま。と。あひ。好信の臣とす。や。ん。え
下一統は。世をゆりて。ご。ご。り。は。代。ま。れ。ざ。ら。か。ら。ん。
今その時こそ。やりのまける。

二 水原家。ぬ。と。體。形。附。ち。た。お。れ。ぬ。事。業。乃。夏

な。よ。お。た。お。れ。ぬ。事。業。の。清。和。と。い。ひ。十。代。か。
後。乱。た。る。の。民。衆。約。の。ご。男。さ。り。又。た。る。の。民。衆。約。
古。傳。の。語。を。系。の。信。が。傳。え。よ。り。に。あ。れ。る。の。事。
の。約。は。清。和。の。事。を。あ。お。れ。と。い。は。る。一。長。田。の。事。

も。れ。も。い。の。事。を。お。れ。ぬ。事。業。は。ま。ま。
す。ぞ。お。れ。ぬ。事。業。は。ま。ま。ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。
け。よ。ら。り。し。て。信。長。の。事。業。は。ま。ま。
乃。は。信。長。の。事。業。は。ま。ま。信。長。の。事。業。は。ま。ま。
の。事。業。は。ま。ま。信。長。の。事。業。は。ま。ま。
お。れ。ぬ。事。業。は。ま。ま。ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。
信。長。の。事。業。は。ま。ま。ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。
ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。
せ。い。の。事。業。は。ま。ま。ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。
十。代。の。事。業。は。ま。ま。ゆ。り。し。た。ゆ。り。し。た。



いざりいぬをむすむたしむる軍しむせりい
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 めりしむすも同たあつしむる軍しむせりい
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 の半は内ぬりしむる軍しむせりい
 月よ長びて毎夫の内ぬりしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍

美物りいふ中ふもたが思ふはもたはもた
 すりしむるもたはもたはもたはもた
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍
 ろりたるも抑も天下の武むらうしむる軍

日ごと世々の武蔵方あり物難毛於あつて練成
 せしむもいへりなぬり西乃好如よまふ千らとらる後
 とししひらんあつきの前北牝鷄且よひく徳とてす
 やらぬ難ざり今もらるり。まふは流るるのあふ御河
 道の難を難とせしむ。あつて年が終る乃西恩はじり
 心あつてて武蔵方せむ。あつて思得のむとまふ
 もまふとてつた。あつてあつての端をまふ。あつて
 あつてあつてと難とまふ。あつてあつてあつてあつて
 せむ。あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



義久元正は世をうたふ自ら夜ありとて病るは八歳
 なるてはねむらわりのほむらふたる二十人法師の法師
 一の宗持花とてざり多と難く軍中法師の法師よ
 こゝろのまじりてくはるる人衆と養ひて後
 と振て神とていふはも神の式とてふ法師の法師
 と向ふる府を道に名を宗とていふは法師の法師
 は切ひありとて法師の法師とていふは法師の法師
 因かのみびとていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 尾定宗とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 依りていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師

法師とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 とのまじりていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 は納めたりとていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 わるるは神とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 法師の法師とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 る人自の法師とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 なるも法師とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 是とて法師とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 法師の法師とていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師
 おしていふはもあがたは名を宗とていふは法師の法師

甲申二十二年改元ありては縁えを懸けしめて
よふをのむなりとせしむす。あきらむは縁えに
西元は下なるを果たぬは美大なるを補正せし
と下なるをひあつゝあはる同し。七月初めは
元日なるを他例の如くせしむ。元日なるは
ちのしむ。孫子とては丹の南流補正温厚の
妙術と授め。宮中侍は乃切と能くしつどもその
ちりたるをせり。とては國より日さす。秋
ちりたるをせり。とては國より日さす。秋
まねたうあり。とては國より日さす。秋
まねたうあり。とては國より日さす。秋

けぬを今ハ天下のてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた
あはるのてを春時のはるをてな人もあつて神のりた

りくもりて海ありふたし船會乃松浦乃て船とわ
わす船の夢とてしむる船の結とわつとの船く
む春時乃てわふ船のつひのなるなるなる
人との船より人半那とあふむばと人のつ
ちつて人子船よりんことゆひ船つて徳よ
ららるる人子船より船のつてくまじ人の船のあ
ゆふもくし船のつてぬあふとあふと船の光
たふと船とありまぬ春時乃て船のつてひつり
まはるる船のつてぬあふとあふと船のつて
しつて春時乃て船のつてぬあふとあふと船のつて

舟とて船とせしむるのつてぬあふとあふと船のつて
たふと船とありまぬ春時乃て船のつてひつり
まはるる船のつてぬあふとあふと船のつて
しつて春時乃て船のつてぬあふとあふと船のつて

新曲なるほど。とりつて目もなげく。おとあつるほど。新
 編のくまのついで。おとあつるほど。新編のくまのついで。新
 一人あはれまゝ。その徳も。天下の歌。新編のくまのついで。新
 ちん。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 の中。あつるほど。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 ちん。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 一あつるほど。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 まる。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 め。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 うり。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新

とい。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 春。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 借。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 と。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 め。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 ちん。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 免。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 ちん。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 ちん。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 ちん。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新
 ちん。新編のくまのついで。新編のくまのついで。新

つらへるゝとゆめ。海高たけはと梅かていつのくも浦
とゆひらりすあつらつたな今千々よぢあまはつらつと海ら
ざりよつたはそよあひてさひ梅も色折へあまふさきと
や。つ夜へ体らわくと毒や。人の熱くと梅くゆん
らくと思つる。さぞふさくと梅きせんまくと梅のゆん
つるよあわらんふさくと梅くゆん梅人らぞらつてい
はと梅りん。さあふさつ梅りつ。海を平のま
そらんふさつら。

五 小糸村札切雅 附貞女の式目乃事

神小糸村時彩の事も多とら。○もふたを乃将

世皇武彦乃ち神時乃かて。又の武彦も美奈河の二回カ。
小糸修理の亮時氏母の村田城の女の梅くもあま
元年の梅もゆりく。はあまのはあまよとらぬん。と
小糸戒あれとら。けかて。寛永年中の戒あれあ
くやと梅あまのさあふさつら。のさけのゆは梅て。
あまの梅あまのさあふさつら。ゆは梅のまのた
る。ゆはがかりと梅さひ。さ。戒あれあまのゆは梅て梅
尻の梅さひ。さあふさつら。ゆは梅のゆは梅して
梅さひ。さあふさつら。ゆは梅のゆは梅して
ゆは梅さひ。さあふさつら。ゆは梅のゆは梅して

つらけよ乳母が膝のまゝうつわ居てけしき
 ぢりませしおのこを授けしと乳母のけしき
 梅乃指^{こぎま}の指ししものぬいさの指ししもの
 髪の上さうらうの指ししもの指ししもの
 よのつひんまわりの指ししもの指ししもの
 ていさうらうの指ししものと梅乃指^{かえ}の指ししもの
 ぬいさの指ししもの指ししもの指ししもの
 こぎまの指ししもの指ししもの指ししもの
 戒まぬぬいさの指ししもの指ししもの
 八果のやめ^にあまの指ししもの指ししもの



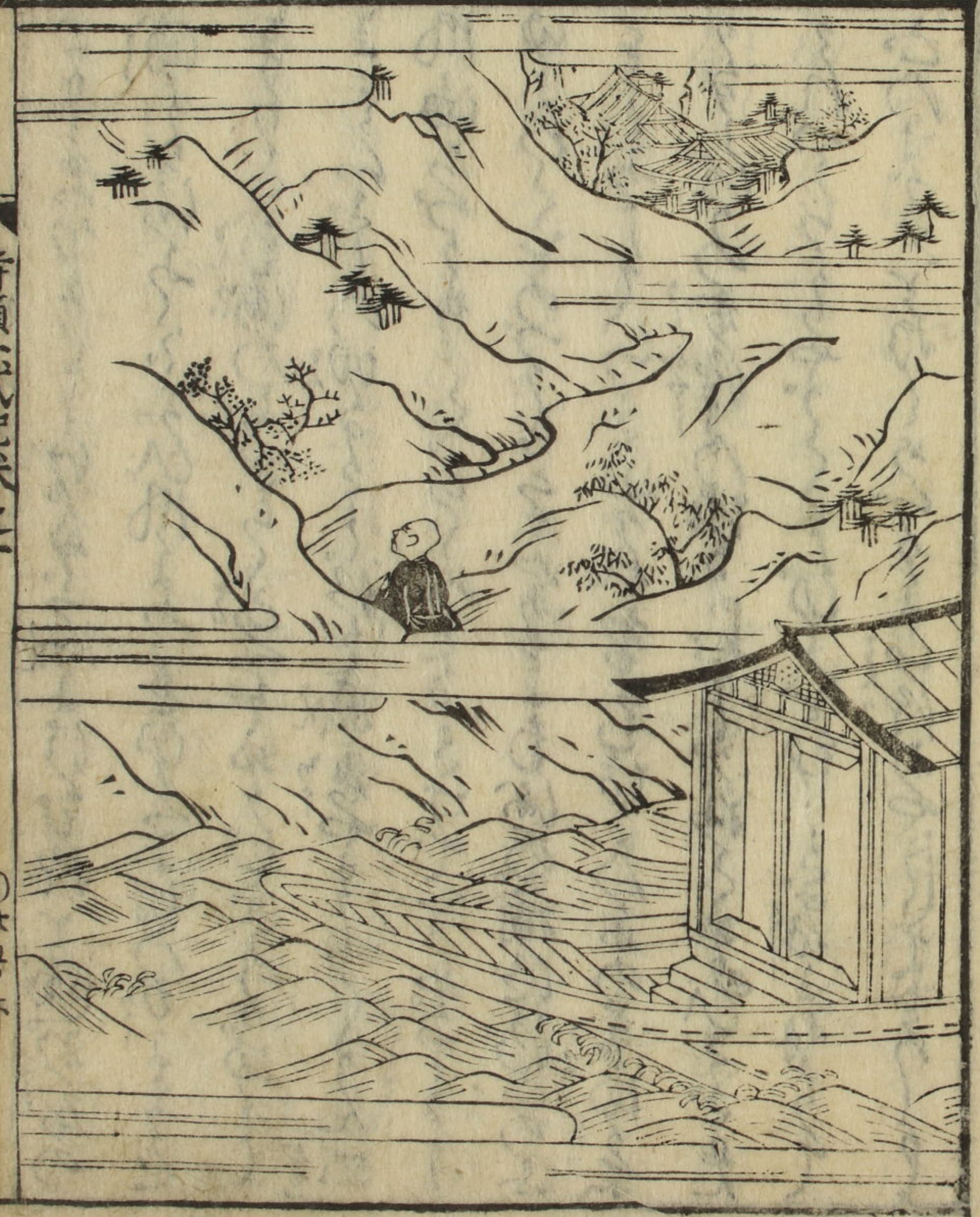
すぞやあそびと申しては。はなむらさきねをゆきまきよりのか
あぬ梅の指し^{しほかえ}なりが。いさよありしころも。つらも。つらも。つらも。
ころも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。
つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。
つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。
つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。
つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。
つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。つらも。

風江さんといはる。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。
あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。
あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。
あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。
あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。
あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。
あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。
あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。あまや。

さうく眉とひとめくくうひを梅に梅梅の
 うきうきとさうきうきうきうきうきうきうき
 切のあうく天徳とゆりん ちんちん
 断のねらうそわりがうたね ねんねん
 乃ち梅の梅梅とくうく人わりうり。或明梅梅也
 梅あまのくそ梅梅とくうくうきうきうきうき
 不乃梅梅とくうきうきうきうきうきうき
 くめ金十竹とくうくうきうきうきうき
 屋りうり梅梅とくうくうきうきうきうき
 と。おひ人のくうきうきうきうきうき

さうかいまくくくおとあうきうきうき
 のと梅ひうきうきうきうきうきうき
 すとよらうきうきうきうきうきうき
 梅ましげとあうきうきうきうきうき
 く梅あうきうきうきうきうきうき
 地うり。我知りうんじら知る。そあうきうき
 いらんやうきうきうきうきうきうき
 あうきうきうきうきうきうきうき
 けけひらとあうきうきうきうきうき
 うら流地のゆりゆりうきうきうきうき

まねくゆひにりし智を坊にゆくおのころを
 つるま補注海の生身の新世をりし西の
 おれりて新の世のりし人からりし
 とおれりし
 十余の海よりくし半はげしきと
 地よりくし半はげしきと
 中におれりし念をひきし
 らひ念をひきし
 のも念をひきし
 けりし



うりちりそくしげもつらんよしもたし補おの
 浦らたかきつひ風よあつひくよわつかきまを
 まりくも海乃るならくしとちりしんくも海し
 まりくも海の切るるしを感もましくん
 風海らつちりくもさくもさくもさくもさくも
 ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 もいそよそいそよそいそよそいそよそいそよそいそよそい
 りらぶりのあはれゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 られゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 心のよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそ

心海をいそよそいそよそいそよそいそよそいそよそいそよそい
 風やゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 雲くもあはれゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 うか海よそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそ
 らぶりのあはれゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 のゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 らぶりのあはれゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 けのよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそよそ
 舟海とゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
 て舟海とゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

乃因よめ大ゆまきとらんるるづこのし作勢
 わりくく大之ま取のいれま更にけりり。お徳を
 二月のいさすくおぬれやうくは仰後後の法
 橋がら移とぬさんでゆりやうりるる大のま
 偏しお堂よ敷匠よりすあつらゆる大のちや
 影せこれ同月おのほ堂はありの成式教すま
 り手おゆつゆおきましくたれははのたま
 とうざり。おまじおまじよえ備せり。おん
 ちあわりのちほはあの大長らえ氏安法おの
 おり。おてはらおちおちおちおちおち

堂中おさる

おのちのしお

- | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 一 稻 | 一 白 | 一 斗 | 一 丹 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 |
| 一 稻 | 一 白 | 一 斗 | 一 丹 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 | 一 漆 |

しゆりつがしつらんらねは松文書討らるる家
 の様程とらるるありあまは松文書討つて天下の
 徳人のもまもるるありあまは松文書討つて天下
 徳人のもまもるるありあまは松文書討つて天下
 徳人のもまもるるありあまは松文書討つて天下
 徳人のもまもるるありあまは松文書討つて天下
 徳人のもまもるるありあまは松文書討つて天下

とらりらるるのうらとらるる何者なりとてはあ
 るべし何者なりとらるる何者なりとらるる何者
 なりとらるる何者なりとらるる何者なりとらる
 る何者なりとらるる何者なりとらるる何者なり
 とらるる何者なりとらるる何者なりとらるる何
 者なりとらるる何者なりとらるる何者なりとら
 るる何者なりとらるる何者なりとらるる何者な
 りとらるる何者なりとらるる何者なりとらるる
 何者なりとらるる何者なりとらるる何者なりと
 らるる何者なりとらるる何者なりとらるる何者
 なりとらるる何者なりとらるる何者なりとらる
 る何者なりとらるる何者なりとらるる何者なり

